
Blade in the Chaos - 開闢と終焉の使者 -

Glaray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blade in the Chaos - 開闢と終焉の使者 -

【Nコード】

N9496Y

【作者名】

Glary

【あらすじ】

人口も多く最も発展した中央大陸に君臨する二つの国家・魔族や怪物など人外存在をも傘下に入れた巨大な魔帝国・イリアデルそして最先端の機械兵器と鍛え抜かれた精鋭達で構成された陸海空軍を誇るミッドハイトⅡエンパイアの熾烈な覇権争い。決着が全く着かない状況の中、ミッドハイト最強を謳われる將軍・リダルアールトが捕虜になる所から状況が一変する。

はじめに

初めまして、G l a r a yと申します。

まずざっと、この「Blade in the Chaos」の概要について説明致します。

この物語は、遊戯王のカード達を登場人物として私が想像した世界を舞台にしていますので、デュエルシーンは一切出てきません。最も人口が多く文明の発展した中央大陸に君臨する二つの国家・魔帝国イリアデルとミッドハイト「エンパイアの覇権争いが中核になります。その中で、「氷結界」や「ジャステイス・ワールド」など、フィールド魔法としておなじみの場所も出てきます。

出来るだけ設定はカードテキスト等々に忠実なようにしますが、都合上勝手な設定などが盛り込まれることもあると思います。ご注意下さい。

主人公は後に「カオスソルジャー」と呼ばれる事になるミッドハイト「エンパイア陸軍最強の將軍・リダルアートです。ちなみに、兜からピヨッと出ているアレは長い赤毛だということになっています。

物語は、彼が闇の力を増幅する「ダークゾーン」でイリアデルの將軍・闇の侯爵ベリアルに敗北して捕虜になった所から始まります。出来るだけ多くの方のために、遊戯王の予備知識が無くても読めるようにしていきたいと思います。

未熟者の書く「遊戯王ファンタジー」ですが、宜しく願ひします！

主要登場人物（前書き）

「Blade in the Chaos」の主要登場人物達の簡単な説明です。最初にざっと載せておきますね。

もちろん、この他にも沢山のキャラクター達が登場する予定です。

主要登場人物

？リダルアート？

24歳。ミッドハイトⅡエンパイアの若き將軍で、戦場では無類の強さを誇る剣士。紅髪紅眼の美形としても有名。冷静な現実主義者で洞察力に長ける。

？アーデイン？

23歳。「混沌の黒魔術師」として名の通った放浪の魔術師で、相当な凄腕。リダルアートの友人。すらりとしたモデル体型に長い黒髪が特徴的。

？フリード？

44歳。無敗を誇るミッドハイトⅡエンパイア將軍。リダルアートの力を見込んで彼を將軍に推薦した。手堅さと突破力を兼ね備えた理想的な軍人。

？ガトムズ？

39歳。ミッドハイトⅡエンパイア將軍で、「X-セイバー」と呼ばれる戦士達の部隊を率いて戦う特攻隊長のような役柄。やや無口な人物だが部下の信頼は厚い。

？ガイア？

31歳。「疾風の暗黒騎士」の異名を取るミッドハイトⅡエンパイア將軍で、騎馬戦と槍術で右に出る者はいない。リダルアートの兄貴分で、彼を名前だけで呼ぶ。

？ミッドハイトⅡエンパイア皇帝？

ミッドハイトⅡエンパイアを象徴的に統治する存在。その姿を直

接見た者は殆どいないが、その慈愛に溢れた言葉などで人々の精神的支えとなっている。

？サイバードラゴンP-405T？

ミッドハイトⅡエンパイアの科学技術を結集した機械兵器「サイバードラゴン」のプロトタイプ通信専用型で、リダルアートが所有。高い人工知能を持つ。

？ダークアームドラゴン？

かつて魔帝国イリアデルの大量破壊兵器と恐れられた暗黒の竜。アーデインに倒された。

？エレコーゼ？

21歳。魔術を無力化する「沈黙の剣士」として、数多くの魔術師を葬り去ってきた孤高の剣士。金髪赤目で隻眼。復讐の為非情になれるが、心優しい青年。

？レイミア？

年齢不詳。イリアデル四女王の一人で、^{フォークイーンズ}「クラブクイーン」。その操る精神操作魔術から「魅惑の女王（アリュールクイーン）」と呼ばれる。気に入った男性を魔術にかけ自分のものにする趣味にする。

？ヴィーナス？

イリアデル四女王のひとりで、「ダイヤクイーン」。純白の翼を持つ光り輝く天使の姿で、「華麗なる金星」（ザ・スプレندیッド・ヴィーナス）の美称がある。

？ワームクイーン？

昆虫から進化した異形の生物達の女王で、イリアデル四女王の一

角でもある。「ハートクイーン」。残虐非道な精神の持ち主。

？シュネー？

年齢不詳。イリアデル四女王のリーダーで、「スピードクイーン」。凄まじい凍気を操り、あらゆる魔術を使いこなす高等魔術師。アーデインの力に興味を示しており、彼を仲間に引き入れたいと考えている。

？ゴ布林キング？

イリアデル四帝王（フォーエンペラーズ）の一人で、「クラブエンペラー」。小鬼ゴ布林を中心に、様々な悪魔達を率いる王者。体が小さい事を気にしている。

？クライス？

38歳。イリアデル四帝王の一人で、「ハートエンペラー」。高尚な精神の持ち主で、全身から光が満ち溢れている。自分の下に6つの属性を操る王達を従えている。

？エンディミオン？

年齢は正確には不明だが、おそらく200歳以上。イリアデル四帝王の一人で、「ダイヤエンペラー」。自らの名を冠した魔法都市の建造者で、強大な魔術師。実質的にシュネーと共に帝国を動かす。

カオスエンペラードラゴン
？混沌帝龍？

イリアデル四帝王最強の存在で、「スピードエンペラー」。イリアデルの象徴でもある。世界に終焉をもたらす程の力を持つといわれるが、現在眠りにについている様子。

Turn 1 敗北！

キン。

リダルアートの血糊で化粧をした剣が弾き飛ばされ宙を舞う。

（なんて力だ…）

リダルアートの、“ミッドハイト”エンパイア最強の剣士”と称せられているという自信に翳りが差した。

？ - 力、技術、速度、そのいずれでも引けを取るつもりは微塵も無かった。なのになった六合剣を交えただけでこれとは。剣の錆びにしてきた他の悪魔共とは訳が違う…

流石は魔帝国イリアデルの將軍 - “闇の侯爵”ベリアルか。

それとも、隠態の内に生きる魔族共の力を高める“ダークゾーン”という地の利のせいか。

それでも、敵陣の中央突破を引き受けると言ったのだ - 自分を信用して下さったガイア將軍、フリード將軍、ガトムズ將軍、そして俺に付いてきてくれた部下達を裏切る事は出来ない。 -

リダルアートは右横に虚しく横たわる剣に手を伸ばす。

しかし、相手の容赦ない一撃の方が須臾早く襲いかかった。

「！？」

頭上に大剣が振り下ろされ、リダルアートの兜が断末魔の叫びを上げ二つに割れた。

流れ出す血と見まがうばかりに紅い髪が舞う。

激痛に顔を歪めながらも、剣を拾い構え直したリダルアートだったが、敵は間髪入れずに追い打ちを掛ける。

「がはっ……………」

リダルアートの腹部に強烈な蹴りが炸裂した。仰向けに倒れ、強く頭を打ちつける。

頭が割れんばかりの痛みで意識が朦朧とする中、リダルアートの前に相手がそびえ立つのがぼんやりと見える。

「ふん…ミッドハイト最強を謳われる剣士とやらも、ダークゾーンの中ではやはりこの程度か」

圧倒的な長身、長い銀髪、背に二枚生えた漆黒の翼 -

堕天使の侯爵ベリアルは、リダルアートの腹部をそのまま長靴で踏みにじり、口元を覆う黒布の下で嘲笑する。

「殺すなら…さっさと殺すがいい…」

リダルアートは何とか腹に力を入れて絞れるだけ声を絞り出した。無様な姿を晒す位なら潔く死を選ぼう - リダルアートは覚悟を決めた。

だが、ベリアルはそんなリダルアートの訴えを塵芥の如く無に帰した。

「それはならんな。こんな高価な貢ぎ物、滅多に手に入らんからな」

「何だと…?!」

リダルアートはその意味を直感し血の気が引くのを感じた。その様子を見下ろしてベリアルは冷笑した。

「貴様は人間にしてはなかなか強く、器量も良い。我らがクラブ

クイーンに献上したら、さぞかしお喜びになる事だろう」

魔帝国イリアデルの広大な領土は八地域に分割されており、それ
フォーエンペラーズオークイーンズ
ぞれ四帝王と四女王が統治している。その内、此処魔の領域・ダー
クゾーン一帯を支配するのは、自分の氣に入った男を禁断の魔術で
虜にして弄ぶのを至上の楽しみとするという“クラブクイーン” -
その事を知らぬ者は赤子を除いて中央大陸にはいない。リダルアー
トは唇を力なく噛んだ。

「俺を奴隷にするつもりだな…?!」

「フッフ、奴隷かどうかは、女王^{クイーン}にお任せしよう」

いつの間に呼んだのか、リダルアートとベリアル^{ベリアル}の周りには悪魔
やら堕天使やらの群れが出来ていた。俺を連れ出すのか - リダルア
ートは全員斬り伏せたい衝動に駆られたが、あいにく体は言う事を
聞かない。

「ルシファア」

ベリアル^{ベリアル}の声で、漆黒のローブを纏った男が歩み出てきた。顔は
闇に閉ざされて全く窺い知る事が出来ない。

「こいつに催眠^{ヒプノシス}を」

「承知…」

男の両眼が突然妖しく輝きを放ち、リダルアートの紅眼にその光
が飛び込んだ。

「うつ…!?!」

リダルアートの顔から苦痛や戦意が一瞬で消え失せ、その両眼が不可抗力によって閉じられた。全身の力という力が奪われ、握られた剣が開いた右手から滑り落ちた。

ベリアル足がやっとリダルアートから離れる。

「よし、お前達、こいつをクラブクイーンの元に連れて行け。くれぐれも丁重に扱うように。…私は残った人間共を始末してくれる」
「分かりました」

人外の者達は指揮官に一礼をすると、リダルアートの四肢を闇色の鎖で縛り付け、半ば引きずるようにして昏睡状態の彼を暗黒地帯の奥へと運んで行った。

ダークゾーン境界線右方に陣取った大規模なイリアデルの部隊をなんとか殲滅し終えたガイアは、黒き俊馬をはやらせて血臭が充満する死の荒野に踏み込み、我が目を疑った。

「まさか、全滅…!？」

自分の悪い予感が外れてくれる事を願いながら、ガイアは転がっている人間やそれ以外のものの死体を一体一体確認するように右手の槍で突いていく。

敵将を討ち取ると言って自ら危険地帯に飛び込んでいった自分の「弟分」を決して信用していなかった訳では無いが、それでもやはりガイアは気掛かりだった。援軍のつもりで来てみると、この有様だ…

ガイアの馬が嘶いた。
警戒をしている証拠だ。

すぐさまガイアが臨戦態勢に入り、空気が張り詰める。
彼の目が前方の敵の姿を捕らえた。

馬上のガイアと頭を並べる程の身長に、闇に融けそうな漆黒の翼を二枚はためかせた堕天使 -

「闇の侯爵ベリアル - !」

「こんな所で何かお探しかな、 “ 疾風の暗黒騎士 ” 殿」

ベリアルは悠然とガイアの元に歩み寄り、不敵に含み笑いをする。
ガイアは相手の口元を覆う黒布を見透かしてその真意を悟った。

「リダルアートは貴様が -」

「クラブクイーンに献上した」

「 - 何だと?!」

嫌な予感を超えた事態の発覚に、ガイアはうろたえた。

一刻も早く本陣に戻って、この事を報告せねば -

しかし身を翻したガイアに斬撃が襲いかかった。 - が刹那、後ろ向きのまま神速でガイアの繰り出した槍が振り下ろされる剣を止めた。喝いた血がこびり付いて光沢を失っている。

「いいのか、敵に背を向けておいて?」

ガイアの神技に舌を巻きながらも、ベリアルは挑発口調で言い放った。仮に此处で戦闘になっても自分が勝利する自信は十二分にあった上、ミッドハイトIIエンパイアでも有数の実力を誇る將軍の首を取るまたと無い機会だと思ったのだ。

「今は貴様の相手をしている場合では無い。それに、リダルアートの討ち逃した獲物だ、第三者が横取りしていい訳がない」

半ば本気、半ば言い訳の言葉だった。ガイアは素早くベリアルの大剣を薙ぎ払い、黒馬の足を急かせた。

「ふん、敗北する前で良かったな。遠吠えになっていたぞ」

ベリアルの悪罵は殆どガイアに届いていなかった。ガイアを乗せた駿馬は既に荒れ果てた闇の地平線に消えていた。

Turn 2 女王の城！

中央大陸の北半分を掌中にした魔帝国・イリアデルと南半分を領有するミッドハイト^{II}エンパイアの境界線から北に踏み出せば、イリアデル領内南部の大半を占める暗黒地帯・ダークゾーンに差しかかる事になる。

ダークゾーンに昼は無い。上空を常に黒雲が覆い隠し、雷鳴が轟くこの魔の一角には原因不明の闇エネルギーが満ちており、魔性の者達の力を高め、そうでない者達の身体に異常をきたす。ダークゾーン中心部は「闇」と呼ばれ、その名の通り殆ど暗黒そのものに等しい。

そして、そこに巨大な城を構えるのが、暗黒地帯を支配するイリアデル四女王^{フォークイーンズ}が一人、“クラブクイーン”だ。

悪魔と墮天使の群れは暗黒を抜けて薄明かりの灯った城門に辿り着いた。

その高さは10メートル、幅は40メートルはあろうか。松明を灯しておく場所が両端に設けられており、門に施された翼を広げた龍の壮大なレリーフが克明に見える。

「クイーンに貢ぎ物があつて参った次第である」

先頭を歩んでいた黒衣に身を包んだ男・ルシファーが門番の騎士二人に声を掛けた。二人とも馬に乗っており、その色も鎧の色も闇に同化しそうである。

「話は伺っております。何でも、ミッドハイト陸軍最強を謳^{うた}われ

る男、だとか…」

「如何にも。まさにこの男のことよ」

ルシファーが後ろを振り向いて合図をすると、一行の中央にいたと見える四体の墮天使が前に出てきて、捕虜を引きずるようにして突きだした。手足を拘束した鎖を各々（おのおの）乱暴に引つ張られていたが、昏睡状態にある為に抵抗も出来ずにいるリダルアートの姿は哀れであつた。紅玉^{ルビー}で造つたような長髪は乱れに乱れている。門番二人は近寄つて身をかがめ、リダルアートの姿を目にするとささやかな感嘆の声を上げた。

「ほお…これは上玉ですな。頭から流れている血もかえつて趣^{おもむき}がある」

「今年連れてこられた二人より更に男前ですね…しかも相当の実力者と見えます」

「そうであろう。クイーンのお気に召すのは必至…そしてもしも“計画”が成功したならば、ベリアル様はクイーンにより高い地位を賜^{たまわ}り、あの方の部隊に所属する我らにも良い処遇が待っていることだろう…ククク」

ルシファーは不気味に笑った。

「“計画”の成功を願うばかりです…それでは、どうぞお入り下さい」

騎士達が大門を開いた。重苦しい音が鳴り響く。ルシファー達一行は、相変わらずリダルアートを無造作に引きずつたままその先へと進んでいった。

その様子を陰から見ていた者があつた。

（おい…ありやありダルアートじゃねえか?! ちょっと下見に来てみたら…なんであいつが捕まってるんだ?…一回陸軍のテントに行ってみつか。こいつはただ事じゃないぜ…）

門番の騎士二人は、門の傍を何者かが走り抜けた事には全く気が付かなかった。

「それはまことか、ガイア將軍?!」

ミッドハイト「エンパイア陸軍の本陣大テントに戻り、事の起りを告げたガイアには当然驚愕の視線が浴びせられた。

「はい、よもや我らをダークゾーン奥地へと誘い出す為の話とも思いません…」

長い金髪と立派な髭を蓄えた中年の將軍・フリードの反応に、ガイアは半ばうなだれた様子で答えた。

フリードは丸い簡易テーブルの上に広げた地図を指差しながら言う。

「此処が我らの現在地、そして“クラブクイーン”の居城は北に遥か400キロメートルあまりのダークゾーン中心部…」

「闇の徒共になら、この距離は苦でも何でも無いでしょう…! しかしただの人間にとってはそうではない」

ガイアの言うように、魔族は一日に何百キロメートルも進む事が出来る力を持っている。ダークゾーン内ならば、その力は更に高め

られる。人間は機械や他の生物の力を借りねば到底追いつく事はかなわない。

「…だが、サイバードラゴンもダークゾーン内では、謎の外力によつてシステムを狂わされ、破損する。つまり、侵入は出来たとしても時間が掛かりすぎる、その上犬死にだろう…」

“サイバードラゴン”は、ミッドハイトIIエンパイアがその技術を結集して造り上げた機械龍で、通信、移動手段、ひいては攻撃要員の中心とも言える。しかしこの度の陸上戦で一機も使用しなかったのは、こういった理由があつたからだ。

「リダルアートの事は諦めろというのですか?!」

ガイアが態度を一変させ、椅子をひっくり返さんばかりに立ち上がり声を荒げた。その勢いたるや、居合わせた者全員が思わず息を止めてのけぞつた程だ。

「……」

フリードは答えられなかった。リダルアートは、ガイアがずっと可愛がつてきた弟分だという事は十分に承知していた。そして、フリード自身、リダルアートの剣技を教えその力を見込んで將軍に推薦したのだということを…。

「いや、諦める必要はないぜ!」

突然フリードの後方から声がした。

「?!何者だ!」

ガイアとフリードがほぼ同時に一喝し声のする方向を向くが、そこには誰もいない。

「??」

「ここだよ、ここ」

当惑するテント内の者達の目の前で、空間が突如一枚のカーテンの様にめくれはじめ、中から一人の男が現れた。

すらりとした均整の取れた長身に、体をぴったりと覆うベルトの多い黒装束、そして長い黒髪 of 青年がそこに立っていた。開いた口が塞がらない様子の戦士達を見やって、彼は悪戯っぽく微笑む。

「あー俺はね、人呼んで“混沌の黒魔術師”さ」

1年前、ミッドハイトⅡエンパイア北部の都市部で長期間にわたる大規模な戦闘があった。

いや、戦闘と言うより、殺戮さつりくと言った方がいいかも知れない。

殺害されたのは戦場で戦う兵士より、何の罪も無い一般人の方が圧倒的に多かったのだ。

その数、実に70万人・それに対し、死亡したミッドハイト軍兵士の数は3万人にも満たない。

そして、彼らの死亡原因は殆どただ一つに帰する。

魔帝国イリアデルの「大量破壊兵器」、闇の装甲龍・ダークアームドドラゴンだ。

当時、あの破壊の権化たる龍を倒す力のある者はミッドハイトにはいないとさえ言われていた。

蹂躪じゅうりゅう・人々の血を供物とするかの様な暗黒龍。その破壊の為だけに存在する爪牙そうがは文明の集大成をただの瓦礫がれきの山同然にし、その吐き出す煉獄れんごくの炎は草木生い茂る場所でさえ焦土へと変えてゆく。その様子は、黙示録アポカリプス実現の日そのものであった。

為す術は何も無かった。ダークアームドドラゴンに立ち向かった所で、サイバードラゴン達はスクラップになる時期を、人間達は墓に入る時期を早めるだけだった。

しかし、絶望の暗雲がミッドハイトⅡエンパイア軍にはつきりとその影を落とした時。

一人の若者によって状況は一変する。

何処からやって来たのか、そして何処へ行くのか…… 凄惨ひようひようを極める人間達の墓場に突如として現れた、素性の全く知れない飄々ひょうひょうと

した黒装束の青年。剣も持たなければ弓も銃も持たず、暗黒武装龍の吐き出した炎の火の粉すらまともに防げないような服しか着ていない殆ど無装備同然の彼は、実は当時陸軍内でも一目置かれた存在であった若き千騎長・リダルアートの親友にして彼が呼び寄せた一流の魔術師^{マジシャン}だったのだ。

ダークアームドラゴンのかすただけでも命を落とすかのように凄まじい攻撃を曲芸師の如く軽々と躲^{かわ}し、闇の魔術でドラゴンを翻弄していくその姿は伝説となっている。

彼はかすり傷も負う事はなく、見事闇の装甲龍を打ち倒した。そして、実に半年に及ぶ悪夢は終わりを告げたのである。

ミッドハイト軍は当然彼に多大な報償なり地位なり与えようとしたが、青年は「ガラじゃない」という事で断り、そのまままた何処かへ行ってしまった。

この謎めいた青年の操る魔術、外見からいつしか「混沌の黒魔術師」の呼称が広まっていった。

今、陸軍のテント内にそんな英雄的人物がいようとは誰が夢にも思おうか。

予想外の事態に、しばらく沈黙がその場を支配する。

“混沌の黒魔術師”は、そこまで驚かなくても……と言いたげな顔で周囲の面々を見渡す。

「なんと……貴殿があのような有名な“混沌の黒魔術師”でいらつしたか」

ようやくガイアが口を開いた。

黒装束の青年はもう一度微笑する。その表情は邪気のない子供のようだ。

「まあね。でも敬語は禁止な、ガイアさん」

「むう……そうですか、いや、そうだな、魔術師殿」

ガイアは妙に気を張っていた。「なんて気安いやつだ」と全員青年に対して思ったが、反感をそそられはしなかった。

魔術師は何やら小声で呪文を唱え、虚空を人差し指でなぞる。するとその部分から立派な黒椅子が一脚滑り出てきた。テント内部の端っこにいる者数人が物珍しそうに声を上げる。

「とりあえず、座るぜ」

彼は椅子の脚を持って床に落ち着かせ、足を組んで座った。

「……貴殿はさっき、リダルアート將軍の事は諦める必要はないと言ったな」

フリードが厳しい目つきで眼前の青年を見据える。

「ああ、言ったよ」

「貴殿は何故此処にいるのか、その真意は何なのか、まずそれからはっきりさせよう」

フリードの言うとおりである。“混沌の黒魔術師”としてこの親しみを持てる青年が有名であるとしても、信用性とそれとはまた別の問題である。

青年は組んでいた足をきちんと正すと、改まった様子で話し始めた。

「……俺は、ある個人的所用があつてクラブクイーンの城に下見

に行った。そうしたら、ちょうど城門の所に、墮天使やら悪魔やらの群れがやって来た」

「……」

「10体から20体位だったろうか、先頭にいたのは“暗黒の眠りを誘う”ルシファー……黒魔術界でも結構有名な奴だ。そいつは門番の男二人と喋っていたな。で、前の方に全身鎖で縛られた奴が引つ張り出された。それがリダルアートだったのさ」

「……」

「やはり……」

ガイアが低い声で呟く。

「あいつは昏睡状態だったっぽいな。たぶんルシファーのせいさ。……で、リダルアートは中に連れ込まれて行った。俺はご存じリダルアートと面識があつてあいつが陸軍の所属だつてことも知っていたから、本営のテントを探してみようと思ったのさ」

全員黙りこくつて彼の顔を食い入るように見つめて話を聞いている。青年はふうと溜息を一つつくと、苦笑した。

「俺の事をあまり信用していないね？」

ちよつとした間があつた。フリードが咳払いをして答える。

「……いや、貴殿が信用に値する人物である事は、よく分かつた。第一、ダークアームドラゴンの件がある。イリアデル軍が貴殿を使う訳が無いのだ」

「まあ、あんな化け物どもの国になんて、頼まれたつて協力はしねえよ。それに仮にもミッドハイト国民なんだぜ、俺は！」

その一言に、皆完全に安堵した様子だ。

それを見て青年も何となく安心したように笑うが、ふと頼杖ほめつえをついて突然思い出したように言う。

「……そっぴゃあ、門番が言っただけ……『前に二人連れて来られてる』みたいな事は」

ガイアとフリードは目を見合わせた。何か引つかかる事があるようだ。

「フリード將軍、それはまさか」

「おそらく……」

「思い当たる事でもあるのか？」

「ああ、実は……」

フリードは説明した。半年前のイリアデル軍との戦闘で、その生死が未だ確認されていない兵士が二人程いる。二人ともフリード將軍の直屬部隊所属で、有数の実力者であった。

一人は新たな將軍候補に挙げた程の強者であった。リダルアールトが將軍の任に就いたのが4ヶ月前の事だから、それより前の話になる。-

「うーん……」

青年は腕を組んだ。

「もしその二人がクイーンアリユールクイーンの城に連れて行かれたんなら、ヤバイな。なんたって相手は、“魅惑の女王”だ……色んな意味で奴隷になっけていてもおかしくないな」

「……」

フリードもガイアも各々違おのおのう思いを抱き目を伏せる。
そんな様子の二人を、青年は努めて明るい笑顔と声で励まそうと
する。

「言っ た通り、諦める必要なんかないぜ！俺は“ 混沌の黒魔術師
”、出来ないことなんてまず無いからさ。絶対何とかして見せるっ
て！」

T u r n 4

ダークコア！（前書き）

若干長いですが、すみません。

Turn 4

ダークコア！

「……でもさ」

青年はきりりと真剣な表情になる。

「俺一人じゃああのデカい城を探索するなんて無理だ。いくら魔術があっても、警備の目やらなんやらを全部かいくぐっていける自信はゼロ」

全員ゴクリと唾を飲み込む。青年はフリード、ガイアだけでなくテント内にいる全員の顔を眺めやった。

「それはつまり、協力が必要だという事だな？」

フリードの言葉に、青年は勢いよく頷いた。

「もちろん。でも、OKな人とそうでない人がいるんだよねあ…」

…」

「??？ どういう事だ？」

確かにこの“混沌の黒魔術師”、魔の一带ダークゾーンに満ちる闇エネルギーから何ら負の影響を受けずにいられる何かがあるようだ、という事は殆ど^{ほとんど}の者が気付いている。「協力できる者」とはおそらくその「何か」を持っている者・しかし、それは何であるのか。

「“ダークコア”を持っているか否かって事さ」

「“ダークコア”？」

青年の言葉に皆目を見合わせて首をかしげる。その様子を見て青年は声を立てずに笑った。

「ま、無理もねえか。魔術用語だしな。……手短に言つと、“コア”^{エレメント}つてのは誰の体ん中にもある、自然界を構成する要素“属性”^{エレメント}を司る所みたいなものさ」

「^{エレメント}“属性”……炎、水、地、風、光、闇のことか」

「そう、それ！」

ガイアの言葉に、青年は嬉しそうな顔をする。話が早そうだと思つたらしい。

「んで、ダークコアを持った奴っていうのは、簡単に言っちゃえば闇属性つて事。人間ではかなりレアな存在だな。実際俺もダークコア持ち。メリットは、ダークゾーン内では力倍増つてとこかな」
「力倍増！？」

全員が声を上げて驚いたのも無理はない。今まで、探査機器も調査隊も送る事の出来ないダークゾーンについてのデータは皆無であり、「ダークゾーンは魔族の楽園」という認識ぐらいしか持っていなかったのだから。

それを知つてか知らずしてか、青年は続ける。

「別に、人外な連中できなくとも力が出る奴もいるってわけだ。逆に、化け物共でもダークコア持ちじゃないんならダークゾーンの恩恵は受けないぜ。むしろ具合悪くなるはず」

「……では、この中にダークコアを持つている人間はいるのか？
……いや、いるかどうか分かる方法があるならの話だが」

フリードが単刀直入に聞くと、青年は少し溜息をついた様にも見

えた。

「ああ、職業柄見たら分かるようになった。で、ざっと全員確認してみたけど……一人しかいねえ。あとは全員アースコア持ちだ」

「その一人というのは？」

「ガイアさんだよ」

「！？ 私が、か？」

自分の名が出た事にガイアは少し動揺した。しかし、彼には思い当たる節があった。ダークゾーン内でベリアルと僅かな時間交戦した時、自分の反応速度、力加減、全て完璧と言える以上の槍術を繰り出す事が出来たのは確かに妙であった。“疾風の暗黒騎士” - 人の噂は得てして真実だと言う事もあるものだ。

「ああ、で、多分乗ってる馬もそうだろうね……つまり条件が揃ってるって訳だ」

しかし青年はその端正だがやや悪戯っぽい顔に困ったような表情を浮かべている。

「でも二人じゃなあ……もう一人欲しいところだ、それもかなり強い人がね。一人よりはマシだろうけど、ちよっときついな。でも時間があまり無^ねえな……」

重苦しい空気がテントの内部を支配し始めたが、フリードがガイアに向かって思いついたように言った。

「……ガイア將軍、あの男ならもしや、と思うのだが」

「それは、もしかしてグレイル千騎長の事でしょうか？」

ガイアの鉛色の目に、希望の光が一瞬煌めいた。

「ああ。だが今回の戦闘員ではない…… 首都の軍本部に連絡して、間に合うだろうか。これは一種の賭けでもあるが……」

ミッドハイト「エンパイアの首都・ブレベオゼルは此処陸軍のテントから南下して500キロメートル余りの場所にある中央大陸最大の都市だ。移動用サイバードラゴンを利用すれば、到着までに一時間もかからないであろう。」

「その、グレイルってのは誰だ？」

青年が興味深げに聞く。

「我が軍でも十本の指に入る実力者だ。その出で立ちと操る魔剣から“黒炎の騎士”という異名を持つ」

フリードの説明に、青年は思うところがあるらしい。顎に手を当ててしばしの間沈黙した後、不敵に口元をほころばせた。

「黒炎使い、か。俺の知る限り、そういうのはほぼ100%ダークコア持ちだ。呼んだらどれ位かかりそうだ？ 二時間までなら大丈夫そうだぜ」

一体どれ程意識が無かったのだろうか……
死んだような深い眠りから目を覚ますと、リダルアートは自分の置かれている状況に少なからず衝撃を受けた。

全身を隙間無く覆^{おお}っていた鎧は如何^{いか}にしてかすつかり脱がされ、あまつさえ上半身の服も脱がされている。つまり半裸だ。そして四肢は鎖で拘束され壁に磔^{はりつけ}にされている。唯一救いだっただのは、ベリアル^{ベリアル}の剣により受けた頭部の負傷が治療されたらしいという事だ。もう痛みはつゆ程も感じない。

まるで大広間の様なだっぴろい空間の床には、龍の紋様が刺繍^{ししゅう}された高級絨毯^{じゅうたん}が一面に敷かれ、精巧なレリーフが施された黒檀^{こくたん}製の巨大テーブル、玉座を思わせる椅子が置かれてある。テーブルの上にあるのは、何やら蒼いオーロラ^{あお}の様に煌めく液体の入ったワイングラスと大瓶だ。飲みかけのカクテルか何かだろうか。

成る程、此処がクラブクイーンの居城の一角か。そしておそらくクイーンの私室……それにしては広すぎるかもしれないが。

リダルアートは縛り付けられ全く力が入らない手足にふと目をやり、戦場では一騎当千の強さを誇る己の肉体が、解決しようも無い問題が存在する事をこれまでに無い程身に染みて感じた。そして、その強さとやらも虚しく壊された過去の神話でしかなかったのだ。「最強」 - 誰がそんな馬鹿げた事を言い出したのだろうか？ 今その者が俺のこの姿を見て、今度は何と言っのだろうか？ -

すると、遙か正面に見える扉が重々しく開いて、三人の人物が入ってきた。

漆黒の鎧を着た両側の二人は、護衛の者と見えた。意外にも人間のようなのだ。そして、二人に囲まれるようにして入ってきた人物は -

「戻っていいわ」

その声で兵士二人は一礼をし、扉の向こうに消える。扉が再び重

厚な音を立てて閉じられた。

「お目覚めの気分はどうかしら、リダルアート將軍？」

まさに誰しもが想像するであろう「女王様」のイメージの権現だ
・ 壮麗なドレスを身に纏った、銀河の輝きを映し出した麗しく長い
髪、そしてそれを美しいと思わない者は存在しないであろう程端麗
な容貌を誇る女。

しかしリダルアートにとっては、それは自分の感情を快い意味で
波立たせるものではない。彼は眉間に皺しわを寄せると、忌々しげに吐
き捨てた。

「貴様が、クラブクイーンか……！！！」

美しい女は艶麗えんれいな唇をほころばせた。

「その表情も素敵よ、私のいい人」

T u r n 5

事態は混迷へ！（前書き）

書いていて恥ずかしかった部分ありの今回。

Turn 5

事態は混迷へ！

リダルアートは、この空間に女王が入ってきた事によって、明らかに大気の比率が変わったのを全身で感じた……

強大な魔力だ。

彼には凄腕の魔術師である友人がいる関係上、魔力とはどういうものかよく分かっている。

クラブクイーンは - 魅惑の女王は、やはり強大な魔術師である事は間違いない。最大限の警戒だけはして置かねばならない。

女王は優雅な足取りでリダルアートに近付いて来る。

リダルアートは背筋が奇妙に寒くなるのに必死で耐えるが、相手を直視出来ず顔を背けた。

やがて、女王はその吐息がリダルアートに掛かるまでに近付いて来た。

そしてその妖艶な唇を開く。

「噂通り……なんていい男なの。何もかも綺麗だわ……」

色気たっぷりな溜息交じりに言う。

「特に、その体……」

「……!?!?」

女王はリダルアートの胸に顔を埋め抱きついた。

彼女の繊細な指先がリダルアートの筋肉質で引き締まった脇腹を撫でる。

「おい……やめろ！何をやっている!?!?」

リダルアートは顔を横に向けたまま叫んだ。健全な男性ならば感じざるを得ない筈の行為は、今の精神状態のリダルアートにはウジ虫が体を這うようなものと同じだ。

しかし女王は彼の訴えを無視し、行為に夢中になっている。

「いい加減にしろ！ 俺から離れろ！」

リダルアートはもう一度叫んだ。全く賢くない言い方だが、彼は殆ど本能で叫んでいるのだから仕方が無い。

女王はぴったりとリダルアートに密着させていた体を離すと、あで艶やかに苦笑した。

「うふつ、貴方がこんなだったら楽しくも何ともないわね。ましてやこんな壁に磔はりつけの状態なんかより、ベッドの上の方がいいのは当たり前……」

女王はリダルアートの手足にしっかりと括くり付けられた鎖を一つ一つ外していく。

ガチャリという金属音がして、彼の四肢が自由になった。……が、全身から力を奪い去る“闇の呪縛”から解放されたのにもかかわらず、体が弛緩している。 - 女王が何か術をかけたに違いない。

「くつ……」

リダルアートがドサリと床に崩れ落ちると、女王は身をかがめ、彼の顔をその白く美しい手でそつと持ち上げた。

えんや艶冶な瞳が、リダルアートの鋭すぎる光を放つ紅い瞳を愛おしそくに覗き込む。

「まあ、お楽しみは後にしましょう。少し休んだら貴方にはまず、やってもらふ事があるわ……」

「何だそれは？」

リダルアートの表情が先程までの険しい表情とはまた違った種類の厳しい表情に変わった。

「剣で一对一の戦いをしてもらふのよ」

「！？」

リダルアートは女王の言っている意味を理解しかねた。しかし彼を無視して女王は続ける。その表情は美しくも悲しげだ。

「貴方は私のいい人……あまり無理をさせたくないわ。けれど、上の命令は絶対……いくら私でも、あの方の言う事には逆らえない」

リダルアートはますます彼女の言葉の意味を分かりかねた。 - 女王が誰かに従うだと？ -

「一体どういう事なんだ？ 説明しろ」

「それは、後できちんと言うわ。……後で下の階に一緒に行きましよう。それからよ」

女王はゆっくりとリダルアートの顔に自分の顔を近づけると、麗しい唇を彼のそれにそっと、丁寧に重ねた。

「んんっ……！」

一瞬にしてリダルアートの頭の中が真っ白になる。高潔なる帝国軍人だから、というべきなのか、こんなのは彼のプロセスの中に全

く無い。……

唇が離れた後も、しばらく彼は目を開けたまま瞬きもせず放心状態だった。

「あら、キスは目を閉じてするものよ？」

女王は立ち上がり、そんなリダルアートの様子を見て笑う。

彼は我に返ると、すぐに乱暴に吐き捨て、唇を親指で拭き取る。

「そんなのは知った事ではない！ ふざけるな！」

「うふふ。初心^{うぶ}ねえ。……とりあえず、服を持って来るわね。貴方に似合うのを探すわ」

何処かへと歩いて行く女王の姿を見送りながら、リダルアートは自分が想像していた事態よりもっと深刻な事態に巻き込まれたものだと思息をついた。

クラブクイーンは「いや、イリアデルは、一体何をやろうとしているのか？ ……事態が理解できない。」

陸軍本営のテント内では、フリード将軍がテーブルの上に置かれた小型コンピュータを操作していた。

これは長距離無線通信機器で、これに登録してあるナンバーの同タイプの機器に連絡を取る事が可能だ。マイクを通して音声会話するのが主な使用法だが、電子文書を送る事も出来る。

フリードが数多ナンバーの連なったりストの中から探そうとしている場所は、勿論500キロメートル南下した場所に位置するミッ

ドハイトⅡエンパイアの首都・ブレベオゼルの軍本部ビルだ。軍本部ビルには何十機も通信用小型コンピュータが設置されているが、今回その中でも連絡を取るうとしているのは、最上階57階に設置された、いわば「マザーブ레인」コンピュータだ。

「よし、あつたぞ」

フリードはリストの中から目的地のナンバーを発見すると、カーソルを合わせてキーを押し、「音声通信」を選択した。

画面に「通信待機中」の文字が表示されたのも束の間、すぐに「通信中」の文字に早変わりする。

「すっげーな。現代の技術って、ここまで進化したのか!？」

感心したように、混沌の黒魔術師がコンピュータ画面を覗き込む。若干はしゃぎ気味だ。

「魔術師殿は、一体いつの時代からやって来たのか!？」

ガイアが呆れたように言うが、黒装束の青年は言い返す。

「魔術師は、今も昔もパソコンなんか使わないの!」

それは真偽不明であるが、青年自身はインターネットの回線も通っていないような田舎の出身なのでパソコンなど使った事はない。その上放浪の身として、パソコン用が使用不可な地域の方が全世界の面積で考えると圧倒的に多いということは重々承知している。

「……こちらガイバル平野陸軍本営だ。グレイル千騎長、応答願う」

フリードがコンピュータの画面に向かって話しかけた。

マザーブレインコンピュータに繋がれば、軍本部ビルの残り全ての通信用コンピュータに自動的に繋がった事になるので、グレイルがビルに待機していると分かっている以上、彼がビル内の何処にしようとも問題は無いのだ。

「……繰り返す。こちらガイバル平野陸軍本営だ。グレイル千騎長、応答願う」

全く応答が無い。

万が一グレイルが不在だとしても、誰かしら応答はする筈である。

「……まさか、全員不在という事もあるまい……？ 相手側の映像に切り替えてみるか」

フリードは相手と通信中の状態にしつつ、コンピュータを相手側の画面に切り替えた。

「そんな事もできるのかよ、すげえな。………！！？」

画面を相変わらず感心しながら覗き込んだ青年だったが、一瞬目を見開いて硬直した。

コンピュータを操作しているフリードも然り。

「どうした、魔術師殿？ ……！！！ これは……一体……？！」

ガイアも画面を見て驚きの余り硬直する。

そこに映っていたのは、破壊されて青天井になり、殆ど剥き出し

の状態になったビル最上階に羽ばたく漆黒の翼竜達の姿だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9496y/>

Blade in the Chaos - 開闢と終焉の使者 -

2011年12月25日14時47分発行